

〔原 著〕

## 養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究（第1報） 家族機能との関連性について

神庭 純子<sup>1)</sup> 藤生 君江<sup>2)</sup> 飯田澄美子<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究は、養育期の家族における育児不安の構造を明らかにし、家族特性及び家族機能評価から育児不安の関連要因を検討することを目的とした。研究方法は、育児不安、家族特性及び家族機能に関する各項目からなる質問紙を用いて調査を実施した。対象は1歳6ヶ月児及び3歳児健診の対象児をもつ母親及び父親で、有効回答の108組216名を分析した。

その結果以下のことが明らかになった。

1) 養育期の家族における育児不安として、育児に対する充実感欠如、育児に対する満足感欠如、生活上の疲労感、子どもに対する否定的感情、育児による拘束感の5つの要因が明らかになった。2) 育児不安と家族機能充足度の間に関係がみとめられ、特に配偶者との相互関係は育児に対する充実感や満足感、生活上の疲労感と関連があった。3) 育児不安に関連する要因を検討した結果、母親の不安は①家計満足度、児の誕生時の思い、児の健康状態、住居形態、母の就労の有無と関連していた。②家族機能の現状では、余暇や娯楽の時間が少ないこと、子どもに関する心配事が多いこと、夫からの精神的なサポートが少ないこと、夫との意見対立があること、体調が悪いことと関連がみとめられた。父親の不安は、家計満足度、児の誕生時の思い、父の健康状態、子どもと過ごす時間と関連していることが明らかになった。4) これらから養育期の家族における育児不安に対して支援をするために、家族内の関係及び社会との関係をふまえて家族機能の現状及び充足度を把握することが重要であることが示唆された。

キーワード：育児不安、家族特性、家族機能、養育期家族

### 1. はじめに

育児不安の問題への対応は、母子保健における重要な課題のひとつである。育児不安の程度には夫婦関係、社会的な人間関係のあり方が関連しており<sup>1)</sup>、その対応には、家庭内及び社会的な人間関係の回復への視点が重要であると指摘されている<sup>2)</sup>。一方、育児不安を感じる対象は母親だけに限られた

ものではないとの見解もあり<sup>3)4)</sup>、柔軟により広く包括的な視点から、育児不安の実態とその要因を検討していく必要があるといわれている<sup>5)</sup>。

育児不安に関する研究においては、包括的な視点から家族内の関係性、社会との関係性をとらえていくことが求められていると考えられるが、これまでに社会的サポートのあり方<sup>3)</sup>や、家族の関係性として特に父親の役割<sup>6)</sup>の重要性を個々に指摘するものはあるものの、家族機能という視点から、家族のあり方を社会との関係性及び家族員同士の関係性から全体として把握し、分析しているものは少ない。そこ

<sup>1)</sup>川口市保健センター

<sup>2)</sup>聖隷クリストファー大学看護学部

で、本研究では、乳幼児をもつ母親及び父親の育児不安の構造を明らかにし、家族特性及び家族機能評価から育児不安の関連要因を検討することによって、養育期の家族への今後の支援のあり方についての示唆を得ることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象

I町において1歳6ヶ月児健診、3歳児健診の対象児を持つ母親及び父親で、本研究への同意がえられた者である。

### 2. データ収集方法

健診対象となる児を持つ母親及び父親に対して、事前に研究依頼書及び自記式質問紙を郵送した。健診時に回収を行った。

健診対象者数148名(1歳6ヶ月児83名、3歳児65名)のうち回収数は、母親129名(回収率87.2%)、父親115名(回収率77.7%)の計244名であった。そのうち、母親、父親ともに質問紙の質問項目にもれなく記入のあった108組216名(有効回収率73.0%)を分析対象とした。調査期間は、2002年1月～7月である。

### 3. 調査内容

質問紙は、以下に示す育児不安、家族特性、家族機能に関する各項目及び自由記述によって構成した。

#### 1) 育児不安

岩田による「育児期の母親の不安」<sup>3)</sup>尺度、15項目を採用した。〈生活疲労〉に関する3項目、〈充実感欠如〉に関する6項目、〈育児不安〉に関する6項目の合計15項目からなり、それぞれの項目について、「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の4件法で測定し、1～4点で得点化を行った。得点が高いほど不安度が高くなる形で、得点方向の調整を行った(肯定的な質問項目に関しては項目得点を逆転させた)。得点幅は15～60で、総得点が高いほど育児不安が高いことを示している。質問項目の内容の検討を行った結果、母親と同様に父親にも

適応しえる内容であると考えられたため、父親の質問紙においても同様の質問項目を用いた。

#### 2) 家族特性

父母年齢、子ども数、家族形態、児の年齢、出生順位、父母の職業、父母の健康状態、児の健康状態、児の出生時の状況、児の誕生時の思い、住居形態、家計状況の満足度から家族特性を把握した。

#### 3) 家族機能

家族機能の測定には、FFFS日本語版I<sup>7)</sup>を用いた。

Feetham 家族機能検査 (Feetham Family Functioning Survey) は、Feetham によって開発されたものであり<sup>8)</sup>、社会エコロジカルモデルに基づいて、家族と各メンバー、家族とそのサブシステム、家族と広範囲の社会の関係から家族を測定する用具である。邦訳され、妥当性、信頼性が検証されている<sup>7)9)</sup>。

〈家族と個々の家族構成員との関係〉10項目、〈家族とサブシステムとの関係〉8項目、〈家族と社会との関係〉6項目の合計25項目からなる。それぞれの項目について、「a. 現在どの程度ありますか」「b. どの程度あると望ましいですか」「c. あなたにとってどの程度重要ですか」という質問に対して、リッカートスケール(ほとんどない～たくさんある、の7段階)で測定し、1～7点で得点化を行った。さらに「d. a得点とb得点の差の絶対値」を項目ごとに算定し、d得点の合計から家族機能充足度を評価した。d得点が0から離れるほど家族機能が十分機能していないことを示している。

#### 4. 分析方法

分析は、統計解析プログラムSPSS 10.1 for Windowsを用いて統計学的に分析した。育児不安及び家族機能の構造を把握するために因子分析(主成分分析、バリマックス回転)を行い、因子別得点を算定した。育児不安と家族機能との関連及び父母の相関関係についての検討には、ピアソンの積率相関係数を用いた。育児不安の要因の検討にあたっては、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

表1. 育児不安測定項目の因子分析結果

(主成分分析 バリマックス回転) n=216

項目	因子負荷量					共通性	因子名 ( $\alpha$ 係数)
	I	II	III	IV	V		
10 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	0.737	0.000	0.114	0.000	0.140	0.586	育児に対する充実感欠如 ( $\alpha=0.79$ )
9 毎日毎日, 同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.720	0.242	0.111	0.000	-0.286	0.674	
15 子どもにかまけてばかりで, 自分の能力や意欲を生かしているという充実感がない	0.663	0.000	0.249	0.266	0.000	0.581	
4 子どもがわずらわしくていららしてしまう	0.642	0.211	0.246	0.000	0.000	0.525	
14 子どもとばかりいて, 孤立した感じがする	0.597	0.000	0.000	0.339	0.243	0.539	
7 自分ひとりで子どもを育てているという圧迫感を感じる	0.583	0.000	0.000	0.215	0.426	0.571	
5 自分は子どもをうまく育てていると思(わない)	0.100	0.797	0.000	0.000	0.241	0.712	育児に対する満足感欠如 ( $\alpha=0.61$ )
12 子育てが楽しく(なく) 毎日が充実して(いない)	0.161	0.716	0.255	0.251	0.000	0.673	
8 育児によって自分が成長していると感じられ(ない)	0.000	0.576	0.107	0.000	-0.298	0.443	
2 朝, 目覚めがさわやかで(ない)	0.000	0.256	0.780	0.000	0.000	0.684	生活上の疲労感 ( $\alpha=0.62$ )
1 毎日くたくたに疲れる	0.245	0.000	0.669	0.241	0.000	0.571	
3 生活の中にゆとりを感じ(ない)	0.300	0.218	0.647	0.000	0.207	0.599	
11 子どもが好きでない	0.223	0.000	0.000	0.809	0.000	0.712	子どもに対する否定的感情 ( $\alpha=0.55$ )
13 子どもがとてかわい(と感じない)	0.000	0.348	0.000	0.733	0.000	0.661	
6 子どもを置いて外出するのは心配でしかたがない(人に預けた場合も含む)と感じる	0.107	0.000	0.000	0.000	0.829	0.707	育児による拘束感
因子の固有値	2.861	1.835	1.732	1.577	1.233	9.238	
因子の寄与率 (%)	19.1	12.2	11.5	10.5	8.2	61.6	
累積寄与率 (%)	19.1	31.3	42.9	53.4	61.6		

全体の Cronbach's  $\alpha$  係数=0.80

### 5. 倫理的配慮

調査にあたって, 以下の倫理的配慮を行った.

1) 研究への参加承諾は, 研究の目的と研究に関する情報を文書で提示した上で, 対象者の自由意志を尊重する.

2) 研究によって得られたデータは, 研究以外の目的で使用されることはなく, 対象者の匿名性及び父母間の解答の独立性とプライバシーを保持する.

## III. 調査結果

### 1. 育児不安の内的構造

育児不安尺度の構造をみるために因子分析(主成分分析, バリマックス回転)を行った結果を表1に示した. 5因子が抽出され, 累積寄与率は61.6%であった.

第1因子は, 「子どもを育てるためにがまんばかりしている」「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていない」「子どもにかまけてばかりで, 自分の能力や意欲を生かしているという充実感がない」等の6項

目からなり, 「育児に対する充実感欠如」(寄与率19.1%,  $\alpha=0.79$ )と命名した. 第2因子は, 「子どもをうまく育てていると思(わない)」「育児によって自分が成長していると感じられ(ない)」等の3項目からなり, 「育児に対する満足感欠如」(寄与率12.2%,  $\alpha=0.61$ )と命名した. 第3因子は, 「毎日くたくたに疲れる」等の3項目からなる「生活上の疲労感」(寄与率11.5%,  $\alpha=0.62$ ), 第4因子は, 「子どもが好きではない」「子どもがとてかわい(と感じない)」の2項目からなる「子どもに対する否定的感情」(寄与率10.5%,  $\alpha=0.55$ ), 第5因子は, 「子どもを置いて外出が心配である」の1項目からなる「育児による拘束感」(寄与率8.2%)と命名した.

### 2. 家族特性

表2に家族特性を示した. 父母の年齢は, それぞれ平均32.7歳, 30.6歳であった. 子ども数は1人35.2%, 2人48.1%, 3人以上16.6%であった. 母の就労は, 正職員, パートがそれぞれ13.0%, 6.5%, 専業主婦が75.9%であり, 昼の主な養育者

表2. 家族特性

				人数 (%)			
項目	区分	母 n=108	父 n=108	項目	区分	母 n=108	父 n=108
父母の年齢 父 32.67 ± 5.17 母 30.62 ± 4.08	20 ~ 24	8 ( 7.4)	6 ( 5.6)	父の健康状態	非常に良い	43 (39.8)	32 (29.6)
	25 ~ 29	36 (33.3)	26 (24.1)		良い	33 (27.8)	40 (37.0)
	30 ~ 34	49 (45.4)	41 (38.0)		普通	30 (27.8)	30 (27.8)
	35 ~ 39	13 (12.0)	24 (22.2)		やや悪い	2 ( 1.9)	6 ( 5.6)
	40 ~ 49	2 ( 1.9)	11 (10.2)				
子ども数	1人	38 (35.2)		母の健康状態	非常に良い	43 (39.8)	29 (26.9)
	2人	52 (48.1)			良い	30 (27.8)	42 (38.9)
	3人	17 (15.7)			普通	31 (28.7)	36 (33.3)
	4人	1 ( 0.9)			やや悪い	4 ( 3.7)	1 ( 0.9)
出生順位	1	47 (43.5)		兄の健康状態	非常に良い	47 (43.5)	37 (34.3)
	2	46 (42.6)			良い	43 (39.8)	44 (40.7)
	3	14 (13.0)			普通	17 (15.7)	26 (24.1)
	4	1 ( 0.9)			やや悪い	1 ( 0.9)	1 ( 0.9)
兄の年齢	1歳6ヶ月	59 (54.6)		兄の誕生時の思い	とても喜ばしい	100 (92.6)	95 (88.0)
	3歳	49 (45.4)			喜ばしい	8 ( 7.4)	13 (12.0)
父母の職業	主婦	82 (75.9)		家計状況の満足度	満足	32 (29.6)	27 (25.0)
	正職員	14 (13.0)	93 (86.1)		やや満足	39 (36.1)	48 (44.4)
	自営業	4 ( 3.7)	13 (12.0)		やや不満足	29 (26.9)	22 (20.4)
	非常勤パート	7 ( 6.5)	0		不満足	8 ( 7.4)	11 (10.2)
	その他	1 ( 0.9)	2 ( 1.9)				
家族形態	核家族	56 (51.9)		住居形態	1戸建て	78 (72.2)	
	拡大家族	52 (48.1)			集合住宅	30 (27.8)	

は、母親が75.0%であった。兄の性別、年齢別の割合はほぼ半数であった。

### 3. 家族機能の内的構造

家族機能尺度の構造をみるために因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った結果を表3に示した。8因子が抽出され、累積寄与率は63.5%であった。

先行研究<sup>7)</sup>に基づき、第1因子「配偶者との相互関係」（寄与率12.0%、 $\alpha=0.78$ ）、第2因子「家事・育児をする時間」（寄与率9.8%、 $\alpha=0.68$ ）、第3因子「知人との相互関係」（寄与率8.9%、 $\alpha=0.71$ ）、第4因子「病気や心配事」（寄与率7.9%、 $\alpha=0.64$ ）、第5因子「身内との相互関係」（寄与率7.3%、 $\alpha=0.62$ ）、第6因子「予想外の社会的イベント」（寄与率6.3%、 $\alpha=0.44$ ）、第7因子「配偶者と社会の関係」（寄与率6.1%、 $\alpha=0.32$ ）、第8因子「経済活動」（寄与率5.3%、 $\alpha=0.41$ ）と命名した。

法橋<sup>7)</sup>による研究では6因子構造であったが、本研究では「知人と身内との相互関係」が「知人との相互関係」「身内との相互関係」に分けられ、「配偶者

と社会の関係」が独立した。しかし、因子を構成する項目ではほぼ同様の分析結果が得られた。また、下位因子は、第1、2因子は「家族と個々の家族構成員との関係」、第3~5因子は「家族とサブシステムとの関係」、第6~8因子は「家族と社会との関係」と3つの側面に分類されたが、これもほぼ同様の項目で構成されており、家族機能の構造化は追認されたいえる。

### 4. 育児不安と家族特性との関連性

育児不安各因子と家族特性各項目間の相関を表4に示した。家族特性の変数の扱いにあたっては、父母及び兄の健康状態は、1非常に良い~4やや悪いの各段階に1~4点の得点を与え、家計状況の満足度は、1満足している~4不満足各段階に1~4点の得点を与えた。兄の誕生時の思いは、喜ばしさの程度をととても喜ばしい0、喜ばしい1とした。住居は、一戸建て住居0、集合住宅1とし、母の就労は、なし0、有職1として扱った。

「育児に対する充実感欠如」は、父の健康状態（母  $r=0.29$ ,  $p<0.01$ , 父  $r=0.32$ ,  $p<0.01$ ）、母の健

表3. 家族機能測定項目の因子分析結果

(主成分分析 バリマックス回転) n=216

項目	因子負荷量									因子名 (α係数)		
	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	共通性			
24. 結婚生活に対する満足感	0.747	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	-0.382	0.000	0.717	配偶者との相互関係 (α=0.78)	I 家族と個々の家族構成員との関係	
3. 配偶者と過ごす時間	0.736	0.173	0.000	-0.161	-0.114	-0.160	0.180	-0.107	0.680			
7. 育児, 家事などに対する配偶者からの協力	0.689	-0.354	0.000	0.102	0.000	0.000	0.000	0.124	0.639			
21. 配偶者からの精神的なサポート	0.623	-0.127	0.185	0.229	0.337	0.000	-0.201	0.000	0.650			
4. 配偶者に関心事や心配事を相談すること	0.602	0.266	0.186	0.246	0.235	0.102	0.000	0.000	0.599			
6. 余暇や娯楽の時間	0.512	-0.202	0.000	-0.230	0.000	-0.450	0.325	0.000	0.684			
25. 性生活に対する満足感	0.450	0.000	0.422	-0.160	-0.112	0.191	-0.305	0.217	0.601			
12. 子どもと過ごす時間	0.000	0.799	0.000	0.000	0.110	0.000	0.000	0.000	0.669	家事・育児をする時間 (α=0.68)		
16. 家事(料理, 掃除など)をする時間	0.000	0.777	0.156	0.130	0.000	0.000	0.000	0.000	0.671			
5. 近所の人や同僚と過ごす時間	0.147	0.000	0.736	0.000	0.000	-0.112	0.000	0.000	0.602	知人との相互関係 (α=0.71)	II 家族とサブシステムとの関係	
10. 育児, 家事などに対する知人からの協力	0.000	0.000	0.671	0.000	0.118	-0.121	0.000	0.000	0.488			
19. 知人からの精神的なサポート	0.000	0.354	0.671	0.000	0.246	0.000	0.000	0.000	0.651			
1. 知人に関心事や心配事を相談すること	0.136	0.458	0.524	0.000	0.199	0.204	0.188	0.000	0.620			
9. 医療機関にかかったり, 健康相談を受けること	0.132	0.000	0.000	0.774	0.108	0.000	0.000	0.138	0.655	病気や心配事 (α=0.64)		
15. 体調が悪いこと	0.000	0.000	0.000	0.740	0.000	0.162	0.188	-0.159	0.648			
11. 子どもに関する心配事	0.000	0.000	0.226	0.686	0.000	0.000	0.000	0.146	0.556			
20. 身内からの精神的なサポート	0.000	0.101	0.216	0.000	0.799	0.209	0.000	0.000	0.741	身内との相互関係 (α=0.62)		
2. 身内に関心事や心配事を相談すること	0.000	0.439	0.159	0.000	0.671	0.132	0.000	0.000	0.703			
8. 育児, 家事などに対する身内からの協力	0.218	-0.115	0.000	0.000	0.587	-0.265	-0.104	0.130	0.520			
22. 日課(家事を含む)が邪魔されること	-0.151	0.232	0.000	0.162	0.139	0.756	0.114	0.000	0.716	予想外の社会的イベント(α=0.44)	III 家族と社会との関係	
23. 配偶者の日課が邪魔されること	0.113	-0.536	0.000	0.000	0.000	0.600	0.174	0.142	0.728			
14. 配偶者との意見の対立	-0.170	0.000	0.242	0.108	0.000	0.263	0.635	0.000	0.584	配偶者と社会の関係 (α=0.32)		
18. 配偶者が仕事(家事を含む)を休むこと	0.000	0.000	0.000	0.106	0.000	0.000	0.621	0.133	0.423			
13. 子どもが園を休むこと	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.138	0.000	0.837	0.728	経済活動 (α=0.41)		
17. 仕事(家事)を休むこと	0.102	0.000	0.000	0.107	0.108	-0.124	0.410	0.622	0.614			
因子の固有値	2.990	2.459	2.220	1.966	1.827	1.564	1.532	1.330	15.888			
因子の寄与率 (%)	12.0	9.8	8.9	7.9	7.3	6.3	6.1	5.3	63.5	全体の Cronbach's α係数=0.73		
累積寄与率 (%)	12.0	21.8	30.7	38.5	45.8	52.1	58.2	63.5				

表4. 育児不安各因子と家族特性各項目の相関係数

	父母の年齢	母の就労	父の健康状態	母の健康状態	児の健康状態	児の誕生時の思い	家計状況の満足度	住居形態
育児I 充実感	母 —	- 0.196 *	0.286 **	0.299 **	0.204 *	0.225 *	0.330 **	- 0.202 *
	父 —	—	0.315 **	0.250 **	0.190 *	—	0.225 *	—
育児II 満足感	母 —	—	—	—	0.202 *	—	0.330 **	—
	父 —	—	—	—	—	—	—	—
育児III 疲労感	母 —	—	0.226 *	0.303 **	0.280 **	0.296 **	0.482 **	—
	父 - 0.296 **	—	0.199 *	—	—	—	0.268 **	—
育児IV 対児感情	母 0.280 **	—	0.189 *	0.225 *	0.311 **	0.444 **	0.277 **	—
	父 —	—	—	—	—	—	—	—
育児V 拘束感	母 - 0.213 *	—	—	—	—	—	—	—
	父 —	- 0.233 *	—	—	—	—	—	—

注) 有意な相関のみ示されたもののみ示す

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

康状態 (母 r=0.30, p<0.01, 父 r=0.25, p<0.01), 児の健康状態(母 r=0.20, p<0.05, 父 r=0.19, p<0.05), 家計状況の満足度(母 r=0.33, p<0.01, 父 r=0.23, p<0.05)と正の相関がみとめられた。

5. 育児不安と家族機能との関連性

育児不安総得点と d 得点の合計点との相関をみると, 母親は, r=0.58 (p<0.001) とやや強い正の相関がみとめられた. 父親は, r=0.20 (p<0.05) と低いものの有意な相関がみられた。

表5. 育児不安各因子と家族機能充足度各因子の相関係数

		家族 i 配偶者	家族 ii 家事	家族 iii 知人	家族 iv 病気	家族 v 身内	家族 vi イベント	家族 vii 社会	家族 viii 経済
育児 I 充実感	母	0.476 ***	0.234 *	0.263 **	0.320 **	0.201 *	0.329 ***	—	—
	父	—	—	0.292 **	—	0.201 *	—	—	—
育児 II 満足感	母	0.405 ***	0.371 ***	0.385 ***	0.338 ***	0.303 **	0.193 *	0.312 **	0.259 **
	父	—	—	—	—	—	—	—	—
育児 III 疲労感	母	0.457 ***	0.361 ***	0.320 **	0.446 ***	0.304 **	0.352 ***	0.342 ***	—
	父	—	—	0.236 *	—	—	—	—	—
育児 IV 対児感情	母	0.211 *	0.304 **	—	—	—	—	—	0.326 **
	父	—	—	—	—	—	—	—	—

注) 有意な相関のみられたもののみ示す

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01 \*\*\* p < 0.001

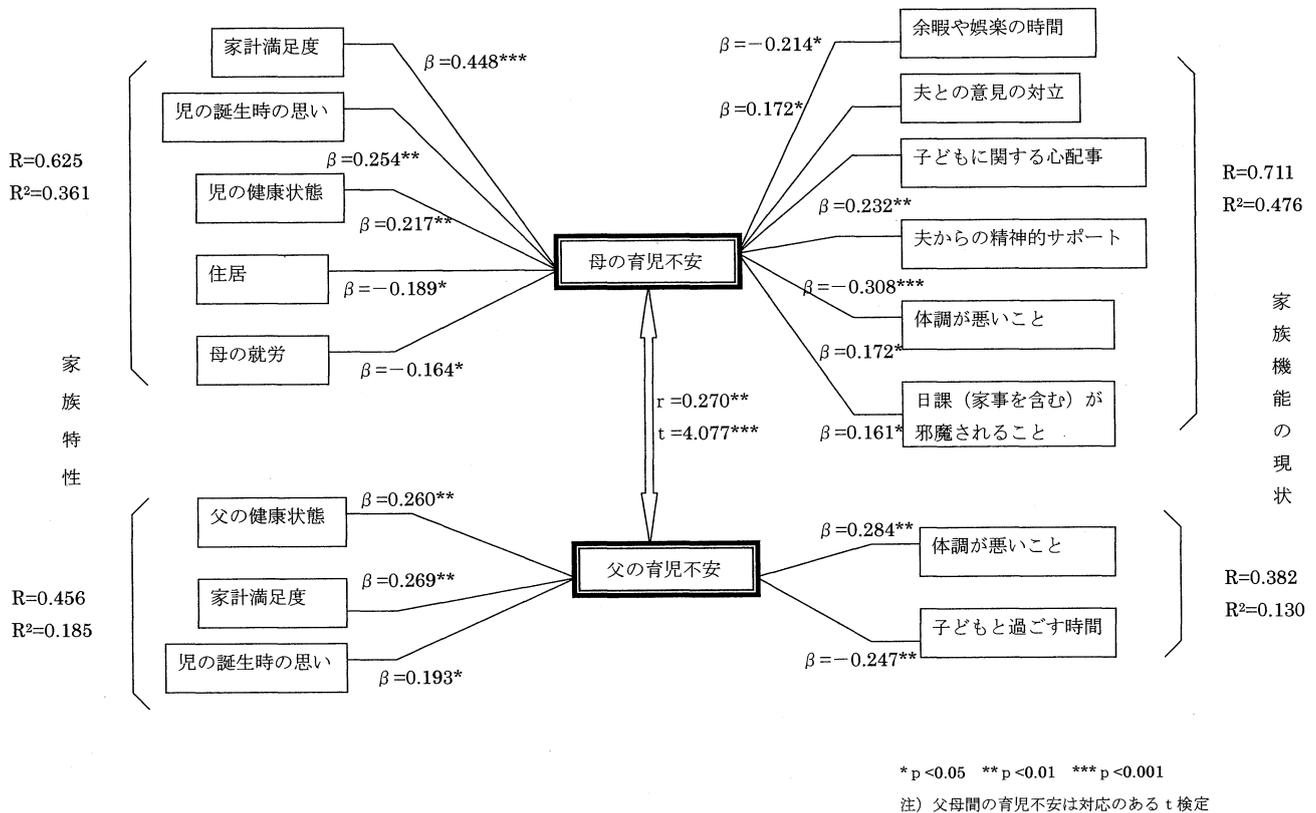


図1. 育児不安の影響要因 (重回帰分析結果)

育児不安と家族機能の各因子間の相関を表5に示した。「配偶者との相互関係」は「育児に対する充実感欠如」(r=0.48, p<0.001), 「育児に対する満足感欠如」(r=0.40, p<0.001), 「生活上の疲労感」(r=0.46, p<0.001)と正の相関がみとめられた。

6. 重回帰分析による育児不安の要因分析

母親の育児不安を従属変数として, 家族特性, 家族機能の現状の各項目を独立変数に重回帰分析 (ス

テップワイズ法)を行った結果をもとに, 母親の育児不安の影響要因の関連図を図1に示した. なお, 家族特性の変数の扱いは先に示したとおりである. 母親の育児不安は, 家族特性では, 「家計満足度」(β=0.45), 「児の誕生時の思い」(β=0.25), 「児の健康状態」(β=0.22), 「住居形態」(β=-0.19), 「母の就労」(β=-0.16)の順に選択され, これらの変数によって分散の36.1%(R=0.625, R²=0.361)が説明された。

つまり、母親の育児不安は、家計に対する満足感が低いほど高い傾向にあり、児の誕生時の喜ばしさの程度が低いほど、児の健康状態が悪いほど高い傾向にあるといえる。

住居は一戸建て住宅に住む人ほど高い傾向にあり、仕事をもたない(専業主婦の)母親は育児不安が高い傾向がみられた。

家族機能の現状では、「余暇や娯楽の時間」( $\beta = -0.21$ )、「夫との意見の対立」( $\beta = 0.17$ )、「子どもに関する心配事」( $\beta = 0.23$ )、「夫からの精神的なサポート」( $\beta = -0.31$ )、「体調が悪いこと」( $\beta = 0.17$ )、「日課が邪魔されること」( $\beta = 0.16$ )の順に選択され、これらの変数によって分散の47.6% ( $R = 0.711$ ,  $R^2 = 0.476$ )が説明された。

つまり、家族機能の現状との関係では、母親の育児不安は、余暇や娯楽の時間、夫からの精神的なサポートが少ないほどに高い傾向にあり、子どもに関する心配事が多い、体調が悪い、日課がじゃまされていると感じる人ほどに育児不安は高い傾向にあるといえる。

父親の育児不安を従属変数として、家族特性、家族機能の現状の各項目を独立変数に重回帰分析(ステップワイズ法)を行った結果、家族特性では「父の健康状態」( $\beta = 0.26$ )、「家計満足度」( $\beta = 0.27$ )、「児の誕生時の思い」( $\beta = 0.19$ )、家族機能の現状では、「体調が悪いこと」( $\beta = 0.28$ )、「子どもと過ごす時間」( $\beta = -0.25$ )の順に選択され、これらの変数によって、それぞれ分散の18.5% ( $R = 0.456$ ,  $R^2 = 0.185$ )、13.0% ( $R = 0.382$ ,  $R^2 = 0.130$ )が説明された。

つまり、父自身の健康状態が悪いほど、家計に対する満足度が低いほど、そして子どもと過ごす時間が少ないほどに父親の育児不安は高い傾向にあるといえる。

また、母親の育児不安と父親の育児不安との関連をみると、育児不安総得点の平均値は、母親 34.42 ( $SD = 6.07$ ) 点、父親 31.84 ( $SD = 4.62$ ) 点であり、父母間に有意な ( $r = 0.27$ ,  $p < 0.01$ ) 正の相関

がみられ、また母親が父親より有意に得点が高かった ( $t = 4.08$ ,  $p < 0.001$ )。

父母ともに育児不安がみられ関連性はあるものの、両群には差異があり、母親の方が父親よりも育児不安が高い傾向にあった。

以上の結果から、母親の育児不安と父親の育児不安とはそれぞれの影響要因をもちながら相互に関連している関係としてとらえられた。

#### IV. 考 察

##### 1. 育児不安の構造

本研究の結果では、育児不安は「育児に対する充実感欠如」「育児に対する満足感欠如」「生活上の疲労感」「子どもに対する否定的感情」「育児による拘束感」という構造として捉えられた。

同様の質問項目を用いた岩田<sup>9)</sup>による先行研究においては、「生活疲労」「充実感欠如」「育児不安」の3因子構造であった。因子を構成する項目についてみると、「生活疲労」「充実感欠如」の両因子は、本研究での「生活上の疲労感」「育児に対する充実感欠如」と同様の項目からなり、「育児不安」因子は、本研究では、「育児に対する満足感欠如」「子どもに対する否定的感情」の2因子に分けられた。

川井らは、育児不安の本態を明らかにすることを目的に調査を行い、児の年齢別に因子分析を行った結果、「育児困難感」として捉えられる「育児への自信のなさ、困惑」と「子どもへのネガティブな感情、態度」からなる二つの心性が育児不安の本態ではないかと指摘している<sup>10)</sup>。本研究の結果からも、「育児に対する充実感欠如」「育児に対する満足感欠如」として捉えられる育児に対する思いと、「子どもに対する否定的感情」として捉えられる子どもに対する思い、そして「生活上の疲労感」とは、それぞれ相対的に独立したものとして育児不安を構成していることが示されたといえる。

##### 2. 育児不安と家族特性との関連

家族特性との関連について検討を行った結果、家

計状況の満足度、子どもの健康状態、住居形態、母の就労の有無、子どもの誕生時の思いが母親の育児不安に関連していることが明らかになった。

家計状況の満足度については、満足度が低いほど育児不安が高い傾向であった。三橋らは、働く母親の適応状況の構造を明らかにし、その関連要因を検討した結果、働く理由や就業意欲といった仕事に対する認識が適応状況に関連しており、働く理由の第1位に「仕事が好き」と回答した群は育児不安が低く、「家計のため」と回答した群は、身体疲労、役割葛藤が高いことを指摘している<sup>11)</sup>。岩田は、育児の困難さと育児不安が生活条件の違いによってどのように違うかを面接調査によって探り、母親の置かれている生活の諸条件によって育児困難の表れ方は異なり、「育児不安」の現象形態は、生活基盤の安定している階層と生活基盤が不安定で、生活問題を抱えているものとは異なることを明らかにしている<sup>3)</sup>。これらのことから、生活基盤である家計状況をどのように捉えているかをみてとることが、育児不安のリスク要因を把握するうえで重要なことであると考えられる。家庭経済との関連で育児認識を詳細に分析している研究はみあたらないため、今後の課題といえよう。

母親の就労と育児不安の関連では、専業主婦ほど育児不安が高く、牧野ら<sup>12)</sup>による結果と同様であった。子どもから片時も目を離すことができず、自由になる時間がないなかで、自分ひとりで子どもを育てている圧迫感や孤立感を感じている状況にあることがうかがわれる。長坂は、専業主婦は閉ざされた「密室での育児」になりがちであり、集合住宅において特に、母親は孤立し不安が深刻化していくと指摘している<sup>13)</sup>。本研究の結果では、一戸建て住宅に住む母親ほど育児不安が高い傾向であったが、本調査の対象地域の特性として、一戸建ての方がむしろ地域の中で孤立化しやすい状況にあることが考えられる。「社会的活動」と「ソーシャルネットワーク」が乏しい場合に母親の不安を高めることになるといわれている<sup>3)</sup>ことから、地域の中で母親の社会的ネット

ワークを広げることの重要性が示唆されているといえよう。

子どもの誕生時の思いについて、とても喜ばしいと感じたとふりかえっているかどうか、現在の母親及び父親の育児不安と関連していた。同じように育児という大変さを経験していてもその受けとめ方には違いがみられるのであり、事実をどのように受けとめ、どのように振り返るか、ということが重要なことであると考えられる。子どもや育児について、母親及び父親がどのように受けとめ、振り返っているかという認識のありように対してアプローチしていく視点が必要であることを示唆していると考えられる。

### 3. 育児不安と家族機能との関連

家族機能の現状では、育児不安と関連のある項目が母親では6項目、父親では2項目抽出され、家族機能充足度では、母親の育児不安と家族機能各因子の充足度には相関関係がみとめられた。

家族機能の現状をみると、母親では、余暇や娯楽の時間が少ないほど、子どもに関する心配事が多いほど、体調が悪いと感じているほどに育児不安が高いという傾向がみられた。長坂は、育児不安の母親側の要因として「母親が精神的・身体的に不安定な状態にある」「母親自身が育児・家事に追われ自分の時間を持ってない」ことをあげている<sup>13)</sup>が、本調査においても同様の結果であった。

また、夫との意見の対立があるほど、夫からの精神的なサポートがないほどに育児不安は高い傾向がみとめられた。家族機能充足度との関連においても、「配偶者との相互関係」についての充足感をえていない母親ほど、育児に対する充実感や満足感を感じておらず、生活上の疲労感を感じている結果であった。榎本らは、夫の協力度、夫の協力への妻の満足度、夫婦の話し合いの頻度は育児不安と関連していると述べ<sup>14)</sup>、牧野らは、夫が実際に理解をもっているか否かは直接には妻の育児不安には関連がなく、夫の理解度にかかわらず、その理解度に妻が満足している場合には育児不安が低いと指摘している<sup>11)</sup>。夫婦関

係の重要性については、本研究の結果においても同様の傾向が示されたといえる。

父親の場合は、体調が悪いと感じているほど、子どもと過ごす時間が少ないほどに育児不安が高いという結果であった。八幡らは、父親が子どもの世話をす頻度や子どもと遊ぶ頻度、母親が父親と子どものことについて話す頻度は、母親の育児不安とは重要視するほどの関係がないと指摘している<sup>5)</sup>。しかし、本調査の結果は、父親自身が「子どもと過ごす時間」の現状をどのようにとらえているかということが父親の育児認識に関連し、それが媒介的に母親の育児不安に関連していることを示唆しているといえよう。

以上のことから、家族機能の現状を把握するばかりでなく、その現状を父母がどのようにとらえ、充足感を感じているかどうかを把握することが、養育期の家族における育児不安の要因をみてとるうえで重要な視点であると考えられる。

#### 4. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、郡部に居住する限られた集団であり、対象者数も216名と限られたものであり研究結果の一般化には限界があり、今後さらに多数の、多様な背景をもつ集団を対象に検討していく必要がある。本研究では、家族機能を家族内関係のみならず家族と社会との関係からとらえ、育児不安との関連をみてとることの重要性が示唆された。しかし、本研究結果からえた家族機能の因子構造において「家族と社会との関係」の領域に属する3因子はいずれも内的一貫性を示す $\alpha$ 係数が低かった。家族と社会との関係をどのようにとらえていくかは今後の課題であると考えられる。

## V. 結 論

1. 因子分析の結果、養育期の家族における育児不安として、育児に対する充実感欠如、育児に対する満足感欠如、生活上の疲労感、子どもに対する否定的感情、育児による拘束感の5つの要因が明らかに

なった。

2. 育児不安と家族機能充足度の間に相関がみとめられ、特に配偶者との相互関係は育児に対する充実感や満足感、生活上の疲労感と関連があった。

3. 育児不安に関連する要因を検討した結果、母親の不安は①家族特性では、家計満足度、児の誕生時の思い、児の健康状態、住居形態、母の就労の有無と相関がみとめられた。②家族機能の現状では、余暇や娯楽の時間が少ないこと、子どもに関する心配事が多いこと、夫からの精神的なサポートが少ないこと、夫との意見対立があること、体調が悪いことと相関がみとめられた。父親の不安は、家計満足度、児の誕生時の思い、父の健康状態、子どもと過ごす時間と相関がみとめられた。

## 謝 辞

調査にご協力下さいました対象者の皆様に御礼申し上げます。

本研究は2002年度聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものであり、研究の一部を第10回日本家族看護学会で発表した。

〔受付 '04. 3. 4〕  
〔採用 '04. 10. 10〕

## 文 献

- 1) 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉。家庭教育研究所紀要，3：34—56，1982
- 2) 佐々木正美：子育て不安と児童虐待への援助，母子保健情報，33：29—33，1996
- 3) 岩田美香：現代社会の育児不安，家政教育社，2000
- 4) 太田 睦：育児不安は生活不安—父親のフルタイム育児体験，こころの科学，103（5）：67—71，2002
- 5) 八幡裕一郎，畑 栄一，佐藤千枝子，他：育児不安に関する要因の検討，日本公衆衛生会誌，46（7）：521—531，1999
- 6) 大藪 泰，前田忠彦：乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅲ—父親の仕事中心志向と家庭中心志向の効果—。小児保健研究，56（1）：54—60，1997
- 7) 法橋尚宏，前田美穂，杉下知子：FFFS(Feetham 家族機能調査)日本語版Ⅰの開発とその有効性の検討。家族看護学研究，6（1）：2—10，2000
- 8) Roberts, C.S., & Feetham, S.L.: Assessing family

- functioning across three areas of relationships, Nursing Research, 31 (4) : 231—235, 1982
- 9) 才木クレイグヒル滋子, 池田優利子: 日本語版 Feetham 家族機能検査の検討, 小児保健研究, 54 (5) : 617—620, 1995
- 10) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する臨床的研究 IV—育児困難感のプロフィール評定試案—, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 34 : 93—107, 1998
- 11) 三橋邦江, 森 恵美, 前原澄子: 働く母親の適応に関連する要因の分析, 日本看護科学会誌, 19 (3) : 1—10, 1999
- 12) 牧野カツ子, 中西雪夫: 乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—, 家庭教育研究所紀要, 6 : 11—24, 1985
- 13) 長坂典子: 家庭という“密室”での育児, こころの科学, 103 (5), 50—56, 2002
- 14) 榎本妙子, 福本 恵, 堀井節子, 他: 育児不安の実態と関連要因の検討 (第2報) —育児不安測定項目の因子分析—, 京府医短紀要, 8 : 163—172, 1999

A Study on anxieties about childcare in child rearing families and related factors (first report)

Junko Kaminiwa<sup>1)</sup>, Kimie Fujiu<sup>2)</sup>, Sumiko Iida<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Kawaguchi City Health Center, <sup>2)</sup>Seirei Christopher University School of Nursing

**Key words :** Anxieties about childcare, family characteristics, family function, child rearing families

We aimed at reviewing anxiety about childcare in families and examined the factors closely related to it by evaluating the family characteristics and function. Families with children were selected and divided into two groups according to the child's age (one and a half-year-old, and 3-year-old), and analyzed. A total of 108 families (including 216 individuals) participated in the study. The investigation was accomplished with a questionnaire comprising of items focused on the characteristics of the family, anxiety about child care and the family function.

As a result, the following issues became clear.

1) Five factors governing a feeling of restriction by child care were deduced. They are (a) lack of substantial feeling for child care, (b) lack of satisfaction, (c) fatigue in a living, (d) negative feeling for the child, and (e) obligation to childcare.

2) Family functioning state was significantly related with anxieties about childcare. In particular, the state of mutual relations with a spouse were related with anxieties of mothers about childcare, composed of feeling of substantiality and feeling of satisfaction for child care, and fatigue in a living.

3) Following factors related to anxieties of child care were also deduced ;

As for a mother, discontentment with household economy, thoughts at the time of birth, the state of health of the children, the form of residence, presence of work or employment at the time of birth, were noted.

As for the present conditions of a family function, a little time of leisure for recreational activities, many concerns about children, a little psychological support from a spouse, conflict with a spouse, ill-conditioned of mothers, were related.

As for a father, concerns about the childcare are discontentment with household economy, thoughts at the time of birth, the state of health of self, and little time to spend with children.

4) In conclusion, to support the families with small children, it was suggested that the health professionals should try to understand the present conditions of family function and a level of attainment in relation with society, and the familial inter-relationships.